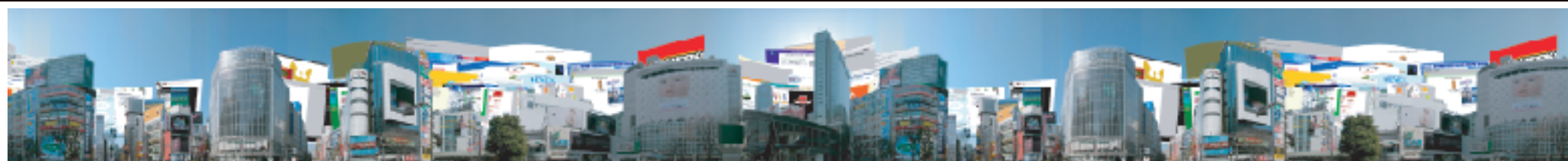


Living Web Browserは、Web上にある情報を抽象的な形態や動きによって表現するWebブラウザである。World Wide Webは約12年前、TimBerners-Leelによって、科学者の間の情報共有システムとして開発された。そこで共有されるべき情報とは、端的には論文のことだった。このことはWebページを記述するための言語HTMLに大きな影響を及ぼした。論文は明示的な参照によって過去の成果へとリンクされるためWebが論文の共有システムとして始まったのは自然なことだった。しかしWebが一般の人へと拡大していくにつれ、Webページの持つ役割は変わっていった。そこで必要とされる情報は、常に論文のような論理的な構造を持っているとは限らず、むしろ視覚的・直感的に意味を伝えることもある。私はここで、ありえたかもしれないもう一つのWorld Wide Webについて想像してみた。そこで考えだされたWebページは、論文ではなくマラルメの詩やカンディンスキーによる絵画を表象するために作られた。もしこのような世界が存在していたら、Webはいったいどのような発展を遂げていたのだろうか。



東京ローカルWeb景：The Air Side of Web Site

杉原 聡

東京の町の風景にうめこまれたWebページを見渡すブラウザ。天井から吊された液晶ディスプレイを回転させることにより、東京のある地点から見た360度の風景を見渡すことができる。その風景には、実際にサーバが存在するであろう場所に浮かんだ、Webページが映しだされる。そこには、これまでのWebブラウザを通して想像するネットワークの風景とは異なった風景が広がる。町や都市の風景の中に立ちならぶ建物が、そこに何らかの人間の営みがあることを表現しているように、Webページもまたそこに確かな人の営みがあることを表現する。Webページは、人間が生み出したものとしてそこに確かに存在すると同時に、例えば町中の建物から吹き出しが現れてその内部を語り出すように、そこに生きる人々の活動を伝え始める。また、日常的に歩いている町の風景を通して見るWebは、人間の身体にくらべて遥かに巨大なネットワークのスケールを、ほんの一端ながらも、見渡せる範囲で直感的に感じとることができる。

私たちは普段なにげなく、Webブラウザを使ってインターネットにアクセスしています。そこで見るWebページは、いつも同じようにWebブラウザの中に存在しているように見えるかもしれません。しかし実は、インターネットにある情報とはただの素材でしかないのです。ここでは、Webという素材を元に様々な表現の可能性を探ってみました。ありえたかもしれない可能性としてのもう一つのWebを、どうぞお楽しみください。

alt.web